

# 令和5年度 高校一般入学試験

## バタバアコース

# 国語

(50分／100点満点)

### 《受験上の注意点》

1. 監督の先生の指示があるまで、試験問題に手を触れないでください。
2. 問題冊子は10ページ、解答用紙は2枚あります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
4. 問題冊子・解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
5. 問題冊子・解答用紙の回収については監督の先生の指示に従ってください。

受験番号	
氏名	

「一」 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(出題に際し、省略した箇所があります) (70点)

もしも人生の意味を考えることがあるとすれば、何らかの意味での挫折を経験した時だろう。自分の勤めていた会社がなくなるとか、健康に自信があった人がケンシン<sup>A</sup>を受けた時に癌<sup>がん</sup>であることがわかったというような時である。好意を寄せていた人に冷たくあしらわれたというような時に思いツ<sup>B</sup>める人もいる。

しかし、幸か不幸か、このようなことをまったく経験しない人もいる。そのような人でも、やがて年老い、近づく死のことを考えて不安になることはあるだろう。だが、いつまでも自分は若いと思いい、身体が弱ればその時はさっさと死ぬなどとイサ<sup>C</sup>ましいことをいう人もいる。実際にそうなった時に、元気だった時と同じことがいえるかはなはだ疑問であるが。

A 身 B 世という言葉は今の時代は死語なのかもしれない。たとえそのようなことを願っていても、大企業であってもツ<sup>D</sup>られる時代なのだから、たとえよい学校に入り、よい会社に入っても幸福な人生を送れるかどうかはわからない。

それでも時代の変化に気づかず、あるいは、気づかないふりをして、今もなお、少なくとも自分だけは幸福になれると思いい、いよいよ競争<sup>I</sup>に勝ち<sup>F</sup>抜くこと<sup>E</sup>で幸福をつかみ取ろうとする人もいる。そのような人にとっては、よい学校、よい会社、幸福という図式がグ<sup>E</sup>ズ<sup>F</sup>れた今の時代状況は、幸福をハ<sup>F</sup>む要因以外の何ものでもない。

成功することが、幸福に生きることを保証してくれるわけではない。この場合の成功とは有名大学に進学し、一流企業に就職するというようなことだろうが、そのような人は子どもの頃から、まわりの大人に成功<sup>II</sup>することが大切だと吹き込まれている。

家族や親戚に成功した人がいれば、そんな人になれといわれる。かくて、何<sup>①</sup>かに「なる」<sup>①</sup>ことが大切なことだと思ってしまう。今「ある」ところにいてはいけなくて、どこかに向かいかねなければならぬ。当然、後<sup>III</sup>ろに退<sup>III</sup>くこと<sup>III</sup>などあつてはならない。三木清は、成功は進歩に関係するといっている(『人生論ノート』)。かつての右肩上がりの経済成長率のグラフが連想されるところである。

三木は、成功は「過程」に関わるが、それに対して、幸福には、本来、進歩というものはなく、「幸福は存在に関わる」といつている。何も達成してなくても、何も所有していなくても、成功しなくても、人は幸福になることができるのだ。

より正確に言えば、成功しなくても幸福に「なる」のではない。幸福で「ある」のである。それが「幸福は存在に関わる」ということである。

② 成功／不成功と幸福／不幸を同一視している人は、成功しなければ幸福になれないと思っている。しかし、今日では、成功したからといって、そのことがかえって人を不幸にするケースが頻りに報道されている。それでも、成功を目標することを完全に断念する人は少ない。高学歴で一流といわれる企業に就職しても、過労死しかねない労働を強いられるようなことがあることを聞かされていても、そして、そのような生活が幸福には結びつかないことを知っていても、自分に限ってそんなことにはならないと思う。実際、多くの人は昇進し、経済的に報われる生活をしているのだから、自分もそのような生活を送れるに違いない、そう思いたいのだ。

成功することが幸福であると考えた人とは違って、生活の中でのささやかな満足にこそ幸福は見出せると考える人がいる。仕事から疲れて帰ってきた時、子どもの寝顔を見ること。家族が一堂にCとして食事すること。そんなことは昇進することに比べたら取るに足らないことのように見えるが、日常の些細な瞬間に幸福を感じられる人は、職場での昇進には執着しない。

④ 子どもの頃、私は父の生き方が少しも理解できなかった。だが、今になって振り返ると、父が夕食時に必ず帰ってきていたのは、早くから昇進を諦めていたからだろうと思う。父が無能だったのではなく、家庭での幸福にこそ満足を求めていたのである。

父のような生き方を選ぶ人は知っている、家庭での幸福こそが何にも代えがたいことであり、日常生活でささやかな幸福を感じられる瞬間を持つことは、人類の偉業と並ぶほどの奇蹟といつてよい出来事なのだということを。(中略)

三木清によれば、幸福は質的なものであり、成功は量的なものである。

お金を得ることや出世するというようなことであれば、イメージするのはたやすい。ところが、幸福は質的なものであり、しかもその幸福は「各人においてオリジナルなもの」なので、他者には理解されないことがある。成功が一般的であるとすれば、幸福は個別的である。

量的なもの、一般的なものと考えられる成功は誰にでも手に入れられるように思われるので、嫉妬の対象となりうる。他方、幸福は質的であり、個別的、各人のものなので、他者からの嫉妬の対象にはなりにくい。三木は次のようにいっている。

⑤「純粋な幸福は各人においてオリジナルなものである。しかし成功はそうではない。エピソード（追隨者風）は多くの場合成功主義と結び附いている」（『人生論ノート』）

これはトルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭に、「すべての幸福な家庭は互いに似ている。不幸な家庭はそれぞれの仕方不幸である」といわれているのはちょうど逆の言い方である。

トルストイは、幸福と不幸を対比しているが、三木は幸福と成功を対比している。トルストイの言葉を借りるならば、「すべての成功者は互いに似ている。幸福な人はそれぞれの仕方幸福である」といえるだろう。互いに似ているからこそ、模倣され追隨されるのだ。

それでは量的なことであれば、必ず嫉妬の対象になるかといえそうではない。百米トルを走るのに十秒を切る人がいても、そのような人を嫉妬する人はほとんどいない。決して自分の手に届く記録ではないことを知っているからだ。

他者の美を妬む人はいる。他者の美を 1 なものと考えているからである。美を量的に捉えている限り、自分にも勝てるのではないかと思う。しかし、実際には他者の美に到底追隨できないとわかれば嫉妬しなくなる。つまり、美が 2 な差異であると知れば嫉妬しようとは思わないし、勝とうとも思わなくなる。化粧や整形ではどうすることもできない美は追隨しようがないからである。

その際、自分は他者の美に敵わないと思う必要はない。他者と自分の美は 3 に異なり、比べることができない、そう見ればいいのである。もちろん、自分の 4 な美も他者から追隨されることはない。

（岸見一郎『幸福の哲学』）

問一 〓〓線部 A～F のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A・B をそれぞれ漢字一字で埋め、四字熟語を完成させなさい。

問三 空欄 C を漢字一字で埋め、「一堂に C して」という慣用句を完成させなさい。

問四 〓〓線部 I～IV のうち、――線部 ①「何か『なる』こと」と、本文において同じような内容のものには A、対比されている内容のものには B と書きなさい。

問五 ー線部 ②「成功／不成功と幸福／不幸を同一視している」とはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 成功すれば幸福だとみなし、成功しなければ不幸だとみなすこと。
- イ 成功には不成功が対比され、幸福には不幸が対比されること。
- ウ 成功と不成功はセットであり、幸福と不幸もセットであること。
- エ 成功するかどうかは幸福かどうかにかかっていること。

問六 —— 線部③「成功したからといって、そのことがかえって人を不幸にするケース」とありますが、そのようなケースに該当するケースを本文中の語句を用いて、三十一字以上三十五字以内で述べなさい。

問七 —— 線部④「父の生き方」とはどのような生き方か。本文中の語句を用いて、三十五字以内で述べなさい。

問八 —— 線部⑤「純粋な幸福は各人においてオリジナルなものである。しかし成功はそうではない。エピゴーン（追隨者風）は多くの場合成功主義と結び附いている」をわかりやすく言い換えた箇所を本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五文字を書きなさい。

問九 空欄1～4には「量的」か「質的」が入ります。それぞれ適当なものを書きなさい。

〔二〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（出題に際し、省略した箇所があります）（30点）

『ゼロ時間へ』（原題：Towards Zero）はアガサ・クリステイの傑作ミステリだが、『百人一首』も今、そもそもの始まりであるゼロ時間へ遡るべき時が来ているように思う。

『百人一首』は日本古典文学で最も知られている作品の一つであるが、その撰者は一般に藤原定家であると信じられている。けれども『百人一首』を定家が編纂したとすると、そこには多くの不可解な疑問と矛盾があり、解決できないままにさまざまな仮説が積み重ねられて、『百人一首』は定家撰というのがほぼ通説となっていたが、一つ一つ解きほぐしていくと、やはり定家撰は成り立ち得ないことがわかってきた。

今から約七十年前に、『百人秀歌』という、『百人一首』によく似たアンソロジーが宮内庁書陵部で初めて発見され、近年冷泉家でも見出された。『百人秀歌』（実際は百一首）と『百人一首』は、いずれも各歌人に一首の和歌を載せる。その歌は、九十七首が同じである。けれども、全体の和歌の配列がかなり異なり、重要な巻末歌二首が異なる。『百人一首』の巻末二首は、後鳥羽院の「人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は」と、順徳院の「もしきや古き軒端のしのぶにも猶あまりある昔なりけり」であるが、この二首は『百人秀歌』には採られていない。

疑問も呈されていたのに、なぜ定家撰ということが受け継がれてきたのだろうか。一つには、定家の心情の側から、深読みされ過ぎてきたのだろう。天才的な歌人定家と帝王後鳥羽院という、新古今時代を代表する二人の運命的な関わり合いに、私たちはある意味で幻惑されてきたように思う。宮廷で和歌文化が沸騰する新古今時代の始まりの時に、この二人は出会い、互いの才能を認め合いながら、やがて対立を深めた。承久の乱で後鳥羽院は討幕を企て、敗北して隠岐に配流された。後鳥羽院と定家は、隠岐と都とに遠く離れて、再び会うことはなかった。都の歌壇の第一人者となった定家は、勅命を受けて第九番目の勅撰和歌集である『新勅撰集』を撰ぶ。しかし政治的な圧力によって、敗北の王後鳥羽院とその子順徳院の歌は、一首たりとも『新勅撰集』に入れることができなかった。

このことから、内心これを不本意とした定家が、『百人秀歌』を編纂してまもなく、それを改編して『百人一首』を作り（その逆という仮説もあ

る)、『百人一首』に後鳥羽院と順徳院の歌を入れることで、いわば個人的に当初の願いを果したとされることが多い。魅力的な解釈であるが、これは成り立たないと思う。定家と後鳥羽院の関係は複雑で、屈折している。定家は、後鳥羽院への言うに言われぬ思いを簡単に人には見せないし、自身の日記『明月記』の中でさえ、殆ど語らないのである。他人に贈呈するアンソロジーで——この場合、相手は鎌倉幕府の重鎮であった——、定家がそれを<sup>③</sup>行うことは考えがたい。

和歌のアンソロジーは、勅撰集でも秀歌撰でも、编者(撰者)は、どの歌人のどの歌を撰ぶか、それをどのように配列するかを深く考えて編纂し、それによって编者の意図、和歌観・世界観や歴史観、あるいは贈呈先・読者層への配慮や意識などを示すのである。

現在、五月二十七日は「百人一首の日」となっている。これは定家の『明月記』の文暦二年(一二三五)五月二十七日の記事に基づく。最晩年の定家が、蓮生入道(宇都宮頼綱)からの依頼で、「古来の人の歌各一首」を、蓮生の山荘の障子(現在の襖)を飾る色紙形(歌を一枚の色紙に揮毫したもの)に書いて送ったとある。蓮生は、定家の嫡男である為家の義父(妻の父)であり、定家とも親しく、幕府の重鎮、有力御家人であった。彼ら宇都宮氏一族は代々、幕府執権の北条氏一族と婚姻関係を結び、富裕で権勢があった。

蓮生一族は、定家一家にとって大切な縁戚であった。そのような人物の依頼で編んだアンソロジーに、承久の乱で幕府と戦い隠岐と佐渡に配流されている後鳥羽院と順徳院の歌を、慎重で冷徹な定家が選ぶ筈がない。定家自身、北条氏一族の人々と近い関係にあり、彼らは定家邸にも出入りしている。このほかにもいくつかの理由があるが、『明月記』の記事は、『百人一首』ではなく、『百人秀歌』を指していると見るべきである。定家は蓮生に依頼され、『百人秀歌』の歌の何首かの色紙形を書いて、この日に送ったのであろう。

また、これまで注目されていないが、定家や為家が蓮生に贈った屏風歌・障子歌はほかに二つあって、そこで定家や為家が新たに詠んで贈った歌は、いずれも蓮生の意向を尊重し、彼が喜ぶような歌なのである。そして、『百人秀歌』の巻末歌群にも、蓮生への配慮が色濃く漂っていると思う。つまり、これまでの『百人一首』研究には、蓮生への贈与品という視点が殆ど欠落していた。定家の個人的な心情を盛る器ではないのだ。<sup>④</sup>

ところで、『百人一首』の歌を書いたいわゆる小倉色紙は約五十枚が伝存しており、定家筆と伝称され、古来珍重されてきたが、大半は後代の偽作であることがわかっている。定家自筆は数枚であるとみられ、後鳥羽院の「人もをし……」と順徳院の「ももしきや……」は、その中には含まれ



ない。だから『百人一首』が定家撰という証拠は、ここにもない。(中略)

このように、当時の記録だけを辿<sup>たど</sup>ってゼロ時間へと遡り、さまざまな憶測を削ぎ落とすと、『百人秀歌』が定家撰、『百人一首』は鎌倉時代中期以降に後人の誰かが手を加えて編纂したもの、ということが明確に浮かび上がる。その『百人一首』撰者は、定家の時代のアンソロジーとして、後鳥羽院と順徳院の歌は欠かせないと考え、彼らの悲劇的な生涯を象徴するような「人もをし……」と「ももしきや……」を、勅撰集から入れたのだろう。

けれども一方で、『百人一首』のうち九十七首は『百人秀歌』で定家が撰んだ和歌であるから、大部分は定家撰の歌である。また構成のコンセプト<sup>⑤</sup>についても、『百人一首』は『百人秀歌』を踏襲しているの<sup>⑤</sup>、『百人秀歌』の秀逸な手法自体は、基本的に『百人一首』に継承されている。歌人一人につき勅撰集から一首ずつを撰んで百首にするという形は、定家が案出したものである。勅撰集にある四季・恋・雑<sup>ぞう</sup>というようなカテゴリーによる配列を組まず、二首一対の歌合形式にもせず、詞書<sup>ことばがき</sup>(和歌の前にある説明)すらも付けず、時代順にシンプルに歌人と歌とを並べるという構成方法は、単純なようだが斬新であった。百の断片に容易に分割でき、その断片の一片(和歌一首)も完成体であるから、種々のメディアに転用でき——ゆえに後世にかかるたが生まれて発展した——、いかようにもアレンジできる融通<sup>ゆうつう</sup>無碍<sup>むがい</sup>\*<sup>3</sup>な作りである。百というと完璧にまとまった閉じた世界の中にあるようだが、可変性があつて、広く開かれている。「学び」にも「遊び」にもなる。詠歌テキストとしてはコンパクトだが、序詞、枕詞、掛詞、縁語、歌枕といった和歌のレトリックがぎっしり詰め込まれており、初学者にも適するテキストである。全体を眺めれば、古代から王朝時代、中世前期までの、六百年にわたる長い和歌史の時間がそこに流れていることが、自ずと感じられるようになっていく。百人の歌人たちの人生が、百首の舞台の上で互いに交錯しているようにも見える。そこには著名歌人だけではなく、さほど知られていない歌人たちの姿もある。古びない普遍性と多様性がある。このような様々な仕組み、思想には、いかにも定家らしい才気、革新性、俯瞰<sup>ふかん</sup>する眼と構成力があると思う。

(田淵<sup>たぶち</sup>句美子「『百人一首』をゼロ時間へ」)

語注

\*1 アンソロジー …… 選集、文集のこと。

\*2 コンセプト …… ここでは一貫してぶれることのない方向性を意味している。

\*3 融通無碍 …… 行動や考えが何の障害もなく、自由に伸び伸びしていること。

問一 —— 線部①「この二首は『百人秀歌』には採られていない」とありますが、なぜか。筆者が最も主要だと考えている理由を六十字以内で述べなさい。

問二 —— 線部②「新古今」とあるが、『新古今和歌集』『古今和歌集』と合わせて三大和歌集と呼ばれている和歌集の名前を漢字で書きなさい。

問三 —— 線部③「それ」が指すものを本文中から二十五字以内で抜き出さない。

問四 —— 線部④「定家の個人的な心情」とありますが、それに当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 後鳥羽院と順徳院の歌を『新勅撰集』に入れられなかったことを不本意とする心情。

イ 『明月記』の中にはわずかに記されていた後鳥羽院と順徳院への言うに言われぬ心情。

ウ アンソロジーを選ぶといったときでも変わらない慎重で冷徹な心情。

エ 蓮生の意向を尊重し、彼が喜ぶような歌を贈りたいという心情。

問五 ――線部⑤『百人秀歌』の秀逸な手法」とありますが、『百人秀歌』の「手法」とはどのようなものか。四十五字以内で説明しなさい。

問六 本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 藤原定家が撰者である『百人一首』は日本古典文学で最も知られている作品の一つである。

イ 現在、五月二十七日は「百人一首の日」となっているのは、『明月記』にその日に『百人一首』を作ったと書いてあるからである。

ウ 『百人一首』の構成方法は、そもそも定家が考案したものであり、単純なようだが斬新であった。

エ 『百人秀歌』には『百人一首』にはない、さほど知られていない歌人たちの姿がある。

問七 〜〜〜〜線部「『百人一首』も今、そもそも始まりであるゼロ時間へ遡るべき時が来ている」とあるが、『百人一首』において「ゼロ時間

へ遡る」とはどういうことか。七十字以内で説明しなさい。

一											
問九	問八	問七		問六		問五	問四	問三	問二	問一	
1							I	C	A	E	A
2	3						II		B	F	B
3							III				C
4							IV				D

受験番号
氏名
採点



一											
8点	8点	8点		8点		6点	12点	4点	4点	12点	
1	す	そ	職	ね	高	ア	I	C	A	E	A
量的	べ	満	場	な	学		A	会	立	崩	検診
	て	足	で	い	歴						
	の	を	の	労	で						
	成	求	昇	働	一						
	く	め	進	を	流						
2	幸	る	に	強	企	A	出	阻	詰	B	
質的	福	と	執	い	業						
	で	い	着	ら	に						
	あ	う	せ	れ	就						
	る	生	ず	る	職						
3		き	、	ケ	し	III	B	勇	C		
質的		方	家	丨	て						
		。	庭	ス	も						
			で	。	、						
			の		過						
4	質的	幸			労	IV	A	潰	D		
		福			死						
		に			し						
		こ			か						

受験番号
氏名
採点

6点				4点	4点			4点	4点		2点	6点		
証	成	ま	定	ウ	う	百	歌	イ	る	ㇿ	万葉集	院	呈	幕
し	立	な	家		も	首	人		こ	百		と	す	府
な	時	仮	撰		の	に	一		と	人		順	る	の
お	の	説	者		。	し	人			一		徳	ㇿ	重
す	記	を	説			、	に			首		院	百	鎮
こ	録	な	を			時	つ			ㇿ		の	人	で
と	の	か	基			代	き			に		歌	秀	あ
。	み	っ	に			順	勅			後		は	歌	っ
	に	た	し			に	撰			鳥		入	ㇿ	た
	あ	も	て			歌	集			羽		れ	に	蓮
	た	の	組			人	か			院		ら	、	生
	っ	と	み			と	ら			と		れ	幕	一
	て	し	立			歌	一			順		な	府	族
	定	、	て			と	首			徳		い	と	の
	家	ㇿ	ら		を	ず		院	か	戦	蓮			
	撰	百	れ		並	つ		の	ら	っ	生			
	者	人	た		べ	を		歌	。	た	入			
	説	一	さ		る	撰		を		後	道			
	を	首	ま		と	ん		入		鳥	に			
	検	ㇿ	ざ		い	で		れ		羽	贈			

受験番号
氏名